

りの低下が続いたことは注目される(46年償還の利付債利回り、11月末10.52%、12月28日9.93%、1月12日9.68%)。

## 実体経済の動向

### ◇生産の大勢なお弱含み

11月の鉱工業生産(季節調整済み)は、前月かなりの減少(−1.8%)のあと、+1.0%の増加となった。しかしこれには、一部大型機械の完成という一時的要因のほか、前月減産の反動増といった事情も響いており、これらの点を考慮すると生産の大勢はなお4、5月ごろをピークに弱含み傾向を続けているといえる。なお12月は速報によれば−1.9%の減少となり、今回景気調整過程においてはじめて前年の水準を下回る(−0.9%)に至った。

11月の生産を特殊類別ないし業種別にみると、まず資本財が+6.1%と、前月大幅減産のあと著増したのが目立つ。とくに輸送機械を除く資本財は+7.3%と大幅な増加を示した。ただこれには、蒸気タービン、船用ジーゼル機関など一部大型機械の完成が大きく響いているほか、全般に前月減産の反動増とみられる面も少なくない。12月は資本財全体で−3.5%、輸送機械を除くと−4.6%となっている。一方建設資材は、窯業(セメントなど)が減産となったにもかかわらず、亜鉛鉄板などが増加したため引き続き増加し(12月は製材、鉄鋼製品などの減産から減少)、また非耐久消費財も、繊維2次製品、洋紙、皮革などの増加から+1.7%と増勢を続けた(12月は減少)。これに対し耐久消費財は、夏物家庭電気機器(冷蔵庫、扇風機など)の増加の反面、テレビ、ラジオなど一部家庭電気機器やカメラなど一部精密機械の伸び悩みなどから、−2.3%とかなりの減少を示した(12月も引き続き−1.6%)。この間生産財は、鉄鋼、繊維1次などは引き続き減産となったが、反面非鉄地金(アルミなど)、化学(化肥、有機合成、石油化

学)、石炭製品などが増加したため、横ばいとなった(12月は各品目軒並み減産となり−1.4%)。

一方11月の鉱工業出荷は、+3.2%とやや目立った増加を示した。ただこれには、生産同様、資本財にみられる一時的な出荷増とか、全般に前月減少の反動増といった事情が響いているので、計数が示すほどに出荷が伸びたとはみられない。10〜11月をならしてみると、出荷の大勢はほぼ横ばいに推移しているとみられる(ちなみに、10〜11月をならした出荷水準は、9月と同水準)。これを特殊分類ないし業種別にみると、まず前月大幅な落込みを示した耐久消費財、資本財が著増したのが注目される。耐久消費財は、冷蔵庫、扇風機、洗濯機など夏物を中心とした家庭用電気機器の出荷増や360CC以下の乗用車、カメラレンズなど一部精密機械の出荷好調などが大きく響いたものであるが、これらのうち夏物電気機器は、例年季節的な出荷期にはいる10月が逆に大幅な出荷減を示しているので、これのずれ込みによる大幅増とみられる面も強い。資本財の出荷著増については、一部大型機械の完工に伴う出荷増という一時的な要因によるほか、小型トラックなど一部輸送機械の出荷好調が続いていることも響いている。以上のほか建設資材も、セメントなどが伸び悩んだものの、鉄鋼加工品、塩ビ硬質製品などが増加

### 生産・需給動向(鉱工業)

(季節調整済み指数、前期比増減率は%)

		36年 10〜 12月	37年 1〜 3月	4〜 6月	7〜 9月	9月	10月	11月
生 産	指 数	126.6	129.3	129.6	128.6	129.8	127.5	128.8
	前期(月)比	3.0	2.1	0.2	−0.7	0.6	−1.8	1.0
	前年同期(月)比	18.7	15.7	11.0	4.7	5.2	1.3	1.8
出 荷	指 数	122.7	125.1	128.6	125.2	126.9	124.9	128.9
	前期(月)比	1.0	1.9	2.8	−2.6	1.1	−1.6	3.2
	前年同期(月)比	15.0	12.8	10.5	3.0	4.9	2.5	5.3
製 品 在 庫	指 数	142.8	153.6	160.1	164.4	164.4	168.2	170.6
	前期(月)比	16.0	7.6	4.2	2.7	0.4	2.3	1.4
	前年同期(月)比	31.7	35.0	35.5	33.6	33.6	29.9	25.1
	在庫率指数	115.2	121.4	127.2	129.6	129.6	134.7	132.4

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は期末在庫。  
前年同期比は原指数による。

したため引き続き増加、また非耐久消費財は、繊維2次製品、皮革などの増加から、生産財は鉄鋼、非鉄、繊維1次などの減少に対し、化学(化肥、石油化学など)、石油・石炭製品などの出荷増から、それぞれ微増となった。

11月のメーカー製品在庫は、+1.4%と前月(+2.3%)に比べ増勢はいくぶん鈍ってはいるものの引き続き増加をみた。在庫率はこれまでのピークであった10月に比べ若干の低下を示したが、これには、前述のとおり一時的な出荷増がかなり働いていることを考慮する必要がある、また10～11月をならした在庫率は、なお前回調整時のピーク(33年1～3月、在庫率指数133.3)をやや上回る高水準にある。11月の動きを特殊類別にみると、最近在庫増の著しかった耐久消費財が、夏物電気機器の出荷増から久しぶりに減少したほかは、軒並み増加を示した。資本財が設備投資の減退を反映して金属加工機械を中心に引き続き著増したほか、非耐久消費財も洋紙、ゴム靴などを中心に増勢持続、またこのところ出荷好調から減少を続けてきた建設資材も、当月は窯業の出荷減から増加となり、生産財も鉄鋼、非鉄、化学などを中心に微増となった。

この間、11月の原材料在庫は+2.1%と前月に引き続きかなりの増加を示した。在庫率指数も、97.0と9月のボトム(94.1)から2.9ポイントの上昇となり、ほぼ7、8月ごろの水準まで戻している。内訳をみると、素原材料が国産分を中心に前月に引き続きやや目立った増加を示したほか、製品原材料も増加した。このように原材料在庫が増加したのは、主として原料油脂など一部における調整一巡に伴う補てん需要の台頭によるほか、輸入自由化に伴う製紙パルプの輸入増や市況対策の関係から大手鉄鋼メーカーの鉄くず在庫がふえていることも響いている。いまのところ業界の在庫補充に対する態度は、依然総じて慎重であるが、市況全般にみられる持ち直し歩調や原綿、原毛など国際原料品市況の上昇気配などとあいまち、今後の動向が注目される。一方10月の販売業者在庫は、

+5.7%と前月に引き続きかなりの増加を示した。前月著増した輸入素原材料は減少したが、製品の方は鋼材、石油製品、自動車などを中心に引き続き大幅な増加を示した。

11月の機械受注(海運を除く民需)は、前月比-20.4%と引き続き大幅な減少をみせた。前月の大幅減(9月比-35.4%)には9月における期末著増の反動減がかなり響いており、11月にもそうした面がいくぶん尾を引いているともみられるので、機械受注は表面計数にみられるほどの減勢ではないにしても大勢は依然弱含み傾向を続けているとみられる。また11月の機械販売額(船舶を除く)は、前月大幅減のあとほぼ保合った。しかし10～11月の機械販売額の水準はかなり低く、期末著増の反動減を考慮しても、なおゆるやかな減勢をたどっているとみてよからう。輸送機械を除く資本財出荷も一時的な事情を考慮すると大勢は減勢傾向にあることなどからみて、工事ペースでの設備投資の鎮静状態はなお変わっていないといえよう。

#### 需 要 関 係 の 指 標

	36年 12月	37年 3月	6月	9月	10月	11月
素 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	118.8 (99.0)	122.2 (102.7)	117.5 (102.2)	108.9 (94.7)	111.2 (94.3)	114.3 (97.4)
うち 輸 入 分 (在 庫 率)	130.0 (122.6)	124.8 (98.7)	120.5 (101.1)	105.6 (91.7)	110.9 (92.7)	111.8 (96.7)
製 品 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	130.3 (105.6)	129.4 (103.9)	121.3 (102.4)	117.2 (96.4)	116.1 (95.6)	117.7 (98.0)
販 売 業 者 在 庫 (前年同期(月)比%)	136.2 (33.0)	138.7 (21.7)	146.4 (19.1)	149.9 (15.6)	158.4 (17.8)	—
	37年 1～3 月平均	4～6 月平均	7～9 月平均	9月	10月	11月
機械受注(民需) (前年同期(月)比%)	590 (-30.6)	420 (-47.7)	488 (-45.7)	698 (-27.3)	451 (-34.6)	359 (-30.1)
機械販売(船舶を除く) (前年同期(月)比%)	952 (26.1)	902 (15.1)	1,003 (11.9)	1,162 (12.2)	809 (-8.5)	826 (-6.4)
資本財(輸送機械を除く)出荷	149.2	142.1	136.7	137.5	123.3	129.0

(注) 在庫、出荷は通産省調べ、季節調整済み指数(35年=100)。

機械受注、販売統計は企画庁調べ。

販売業在庫の前年同期(月)比は原指数による。

#### ◇商品市況、鉄鋼、繊維中心にジリ高続く

12月から1月前半にかけての商品市況をみると、鉄鋼、繊維をはじめ石油、紙、化学の一部などに引き続きジリ高ないし強含み商売がみられ、次第に底入れ観が強まってきている。

おもな商品の動きをみると、まず鉄鋼は、中形鋼、厚板中心にジリ高歩調を続け、年明け後はそれが全品目に広がってきており、相場も昨年8月反騰時のピークと同水準ないしそれをやや上回る水準にまで達している。また繊維も、これまで低迷商状にあった毛糸が急反発を示し、綿糸、スフ糸も小戻しを続けるなど全般に持ち直しの気配がいつそう強まってきた。もっとも年初には一時やや訂正安の場面もあったが、月央にかけて再び立ち直りをみせ、生糸の高値更新をはじめ綿糸、毛糸なども昨年末をさらに上回る相場を示現している。このほか、石油が需要期の関係に加えて、標準価格制が実施されたことを背景として全品目にわたってかなりの反発を示している。また紙や化学製品も総じて小戻しなしいし落着き商状を強めている。このようななかにあって比較的軟弱な動きを示している商品をあげると、セメントは横ばいを持続、非鉄が過剰在庫から、木材が末端需要の不振からともに弱保合いとなっている。

このように最近の商品市況が、ここ数か月続いた全面安商状から漸次底入れ観を強めてきた背景としては、金融緩和に伴う換金売りの減少や生産調整の続行の効果ないしそれに対する期待人氣があったことはいうまでもない。これに季節需要の台頭(燃料、化肥、合成樹脂)や輸出成約の増加(化肥)などが加わり、ある程度需給バランスが改善の方向に向かっていることも響いている。しかし、最近の動きで注目されるのは、第1に、先行き金融緩和の浸透期待や大型予算案を好感した先行き需要の増大に対する期待などが次第に市況ジリ高の背景として現われつつあることである。第2に、原綿、原毛をはじめ海外原料品市況がジリ高ないし先高見込みとなってきたことがかなりの影響を及ぼしていることである。

しかし実需筋の動きをみると、在庫はすでに調整一巡し、かなり切り詰められているにもかかわらず、繊維の一部に若干手当買いがみられるほかは、全般になお買い控えの態度は改まっていな

## 卸 売 物 価 の 推 移

(単位・%)

	引締め前*	引締め後	最 近 の 推 移								36 年中	37 年中
	33/11~ 36/9	36/10~ 37/12	37 年 10 月	11 月	12 月	12 月 上 旬	中 旬	下 旬	1 月 上 旬			
総 平 均	+ 5.8	- 2.5	- 0.1	+ 0.1	+ 0.7	+ 0.5	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.2	+ 1.1	- 1.4	
食 料	+ 2.8	+ 3.6	+ 0.3	+ 0.3	+ 3.1	+ 0.5	+ 0.2	+ 0.3	- 0.4	+ 0.5	+ 2.9	
織 維	+ 8.9	- 0.8	- 0.6	+ 1.0	+ 2.6	+ 0.8	+ 1.2	+ 1.1	+ 1.3	- 2.7	+ 5.8	
鉄 鋼	+ 6.3	-12.5	- 1.2	- 0.5	- 0.9	- 1.7	+ 0.6	+ 0.8	+ 0.9	- 0.4	-10.8	
非 鉄	+ 7.8	- 7.7	- 0.1	- 0.3	- 0.3	- 0.2	- 0.1	保 合	- 0.1	+ 0.5	- 7.2	
金 属 製 品	+12.0	- 4.5	- 0.7	- 0.6	+ 0.3	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.1	- 0.1	+ 0.8	- 4.3	
機 械	- 2.2	- 2.3	+ 0.1	+ 0.1	- 0.8	- 0.4	- 0.1	保 合	+ 0.1	- 1.1	- 1.9	
石油・石炭	- 7.9	- 0.5	+ 0.2	+ 0.3	+ 1.9	+ 1.6	+ 0.1	保 合	- 0.2	- 4.7	- 0.5	
木 材	+37.6	- 5.1	+ 0.8	- 0.3	- 0.6	保 合	- 0.3	- 0.2	- 0.1	+15.5	- 2.3	
窯 業	+ 6.4	+ 3.5	+ 0.4	保 合	- 0.2	- 0.1	- 0.1	保 合	- 0.1	+ 8.5	+ 0.7	
化 学	- 3.0	- 4.3	- 0.3	- 0.2	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.1	保 合	+ 0.1	- 2.3	- 3.3	
紙・パルプ	+ 7.7	- 4.9	- 0.8	+ 0.6	- 0.1	保 合	保 合	保 合	保 合	+ 5.7	- 4.6	
雑 品	+18.3	- 0.1	+ 0.6	+ 0.3	- 0.2	- 0.1	+ 0.2	- 0.1	保 合	+ 7.2	- 1.8	
工 業 製 品		- 3.1	- 0.1	+ 0.1	+ 0.2	保 合	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.3	+ 0.2	- 1.9	
非工業製品		- 0.3	+ 0.3	+ 0.1	+ 2.3	+ 2.2	+ 0.1	+ 0.3	- 0.3	+ 4.6	+ 0.4	
(農水産物)		+ 2.9	+ 0.7	+ 0.2	+ 3.5	+ 3.3	+ 0.2	+ 0.4	- 0.7	+ 3.7	+ 3.6	
(鉱 産 物)		- 0.7	- 0.1	+ 0.2	+ 0.1	- 0.1	+ 0.1	保 合	- 0.4	+ 2.0	- 1.4	
(そ の 他)		-10.5	- 0.7	- 0.4	+ 0.4	+ 0.4	保 合	+ 0.3	+ 1.0	+11.2	- 8.8	

(注) 38 年 1 月改定の新指数(35年基準)による。\* 印は戦前基準指数により算出(工業製品以下は不詳)。

い。このため市況ジリ高が続いているにもかかわらず、メーカー、流通段階を中心に依然荷もたれ感が重くのしかかっている点には、大きな変化はない。しかも市況立ち直り品目のなかには早くも減産強化を避け、あるいは減産体制をくずそうとする動き(鉄鋼、繊維の一部)もみられる。こうした動きの底にひそむものは、依然として供給面の圧力がかなり強いということであり、いまの小戻し商状の広がりがこのまま市況の本格的立ち直りに結びつく公算は小さいと考えられよう。

12月の本行卸売物価(38年1月改定による新指数)は、上記のような商品市況の動きに加え、消費者米価の値上げが大きく響いて前月比+0.7%の上昇となった。また1月上旬についても前旬比+0.2%と続騰を示している。12月の東京小売物価も、上記米価引上げのほか木炭、まきなどの季節的事情による値上がり、羽二重など一部繊維製品の高騰から前月比+2.0%となった。12月の消費者物価は、野菜続落の反面、米をはじめ正月を

控えて卵、果物、加工食品あるいは映画観覧料が上昇したほか、理髪代、パーマメント代、冬の衣料なども軒並み上昇したため+1.4%となった。なお11月の輸出物価は、金属、食料品が続落の反面、生糸、絹織物など繊維品の大幅上昇や合板の値上がりから前月比+0.5%と久しぶりに反騰を示した。一方輸入物価も、原綿、原毛をはじめ小麦、大豆、ラワン丸太など多くの品目で上昇がみられ+0.7%と7ヵ月ぶりの大幅反騰となった。

◇輸入の漸増傾向続く

12月の為替収支は総合で48百万ドルの黒字となった。貿易収支は11月は、久しぶりに黒字幅縮小をみたが、当月は85百万ドルの大幅黒字となった。これは、輸入が引き続き増加したにもかかわらず、輸出が季節的事情に加えて例年以上に年末積み急ぎによる増加が目立ったこともあって大きく伸びたためである。貿易外収支は利子配当、海運など年末関係の支払が集中したため、払超24百万ドルとなった。一方資本勘定では、長期資本が外債発行代り金の流入、インパクト・ローンの受入れなどがあって39百万ドルの受超となった。し

CPI・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

		36年中	37年中	最近の推移		
				10月	11月	12月
C P I  (東京)	総 合	+ 8.8	+ 5.0	+ 1.7	- 0.3	+ 1.4
	食 料	+ 10.6	+ 4.0	+ 3.4	- 1.8	+ 2.0
	家賃地代	+ 3.9	+ 5.9	+ 0.9	+ 1.1	+ 1.9
	サービス	+ 13.2	+ 12.9	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.6
	公共料金	+ 6.1	- 0.1	保合	+ 0.7	保合
	そ の 他	+ 4.8	+ 3.5	+ 0.8	+ 1.5	+ 1.5
	被 服	+ 6.8	+ 7.0	+ 0.5	+ 1.1	+ 1.2
	光 熱	+ 4.9	- 0.5	+ 0.1	+ 0.5	+ 0.6
	住 居	+ 6.8	+ 2.3	+ 0.4	+ 0.8	+ 0.7
	雑 費	+ 8.1	+ 7.2	+ 0.3	+ 0.8	+ 1.1
小 売 物 価	総 平 均	+ 7.9	+ 1.8	- 0.5	- 0.4	+ 2.0
	(食料を除く)	+ 5.5	+ 1.8	+ 0.9	+ 0.2	+ 0.5
	食 料	+ 9.6	+ 1.7	- 1.6	- 0.9	+ 3.1
	織 維	+ 3.2	+ 2.8	+ 1.5	+ 0.1	+ 0.4
輸 出 入 価	輸 出	+ 0.4	* 同水準	- 0.1	+ 0.5	
	輸 入	+ 0.1	* - 1.4	保合	+ 0.7	

(注) \* 印は37年1~11月中。

為 替 収 支 の 推 移

(単位・百万ドル)

	37年4 ~6月	7~9月	10~ 12月	10月	11月	12月
輸 出	386 ( 318)	411 ( 337)	448 ( 369)	435 ( 331)	405 ( 351)	505 ( 424)
輸 入	397 ( 427)	355 ( 424)	371 ( 416)	340 ( 395)	352 ( 399)	420 ( 453)
貿 易 尻	- 11 (-110)	56 (- 90)	77 (- 47)	95 (- 64)	53 (- 48)	85 (- 29)
貿易外尻	- 20 (- 10)	- 13 (- 11)	- 21 (- 10)	- 25 (- 12)	- 14 (- 7)	- 24 (- 13)
経 常 尻	- 31 (-120)	43 (-101)	56 (- 57)	70 (- 76)	39 (- 55)	61 (- 42)
長 資	21 ( 20)	34 ( 9)	22 ( 17)	13 ( 29)	15 ( 13)	39 ( 10)
短 資	49 ( 75)	- 42 (- 2)	- 25 ( 3)	22 (- 59)	- 61 ( 51)	- 37 ( 17)
資 本 尻	69 ( 96)	- 8 ( 7)	- 3 ( 20)	35 (- 30)	- 46 ( 64)	2 ( 27)
誤 差	- 18 (- 4)	- 2 (- 7)	- 13 (- 4)	- 20 ( 2)	- 5 (- 26)	- 15 ( 12)
総 合 尻	21 (- 28)	32 (-101)	40 (- 41)	85 (-104)	- 12 (- 17)	48 (- 3)

(注) カッコ内は前年同期(月)。各期は月平均。

かし短期資本は、輸入ユーザンス増加の反面、米市銀3行からの特別借入返済、外銀の決算関係によるユーロ・マネーの引揚げなどから37百万ドルの払超となった。このため差引き資本収支尻は、2百万ドルの受超にとどまった。なお、ユーロ・マネーは当月中著しい流出をみたが、海外金融市場の緩和基調もあって年末ギリギリには早くも還流ははじめ、月中の流出は小幅にとどまった。更年後も、短期外資の流入が目立っている。なお、輸出入の基調をみる一助として、試みに季節変動・不規則変動調整済み計数(センサス法)によってみると、為替収支は現在貿易外収支の赤字を加えた経常収支尻でわずかながら黒字を維持している状況とみられる。

#### 輸出入指標(季節変動・不規則変動調整済み)の推移

(単位・百万ドル)

	為替統計			輸出指標		輸入指標	
	輸出	輸入	貿易尻	信用状	認証	信用状	承認
36年 9月	329	445	-116	296	361	303	484
10月	332	441	-109	301	362	293	456
11月	348	436	- 88	309	365	270	429
12月	352	406	- 54	325	360	254	376
37年 1月	358	383	- 25	329	362	247	390
2月	365	386	- 21	332	370	246	393
3月	387	396	- 9	342	386	249	404
4月	393	383	10	352	403	245	409
5月	401	364	37	361	436	238	406
6月	402	364	38	353	448	233	407
7月	407	359	48	348	445	231	403
8月	402	369	33	350	455	229	401
9月	409	381	28	358	440	233	409
10月	411	384	27	362	437	238	433
11月	423	394	29	358	429	241	—

(注) 季節変動・不規則変動調整はセンサス法による。

12月の輸出は季節的事情に加えて例年以上に年末の積み急ぎがかさんだこともあって著増し、前年同月比では為替ベースで19%高、通関でも13%高の水準となった。通関統計によって品目別内訳をみると、水産かん詰が欧州向けに順調に伸びているのをはじめ、鉄鋼製品、機械、雑品類の一部(なかでも光学機器)などは米国・欧州向けが前月

やや停滞のあと持ち直しを示し好調である。反面化学製品は前月減少の反動から増加したものの伸びは鈍化しており、繊維品もインドネシア向け米綿委託加工分の船積み終了から前年同月並みの水準に落ち込んだ。

このように当月の輸出はかなりの伸びを示したが、先行指標の動きからみるとここで輸出が再び増勢を強めたとはみられない。認証統計によれば、アジア向けの低調に加えて、今まで輸出の伸びをささえてきた米国向けも、鉄鋼製品などの持ち直しにもかかわらず繊維品、雑貨などの伸び悩みから増勢が鈍ってきており、輸出信用状にも同様の動きがうかがわれる。好調を続けている欧州向けについても今後は水産かん詰のような特殊要因が剥落することを考慮すれば、先行き輸出動向は必ずしも楽観を許さないようである。

#### 輸出認証の内訳

(単位・百万ドル)

月平均	37年 4~6月	7~9月	10~ 12月	10月	11月	12月
食料	29 (+ 74)	27 (+ 9)	38 (+ 40)	36 (+ 35)	39 (+ 43)	39 (+ 40)
繊維	115 (+ 20)	114 (+ 14)	119 (+ 7)	120 (+ 17)	111 (+ 11)	126 (- 3)
化学品	22 (+ 35)	20 (+ 39)	19 (+ 21)	19 (+ 22)	17 (+ 24)	21 (+ 18)
金属	62 (+ 29)	68 (+ 51)	74 (+ 41)	72 (+ 51)	70 (+ 55)	81 (+ 25)
機械	114 (+ 25)	126 (+ 24)	119 (+ 5)	120 (+ 14)	103 (- 1)	133 (+ 3)
雑品	39 (+ 35)	42 (+ 33)	36 (+ 25)	39 (+ 37)	32 (+ 38)	36 (+ 6)
合計	436 (+ 28)	448 (+ 23)	457 (+ 15)	455 (+ 23)	424 (+ 19)	490 (+ 6)
米国	124 (+ 44)	135 (+ 31)	127 (+ 19)	132 (+ 23)	116 (+ 23)	133 (+ 13)
アジア	100 (+ 14)	98 (+ 26)	106 (+ 9)	99 (+ 16)	104 (+ 18)	108 (- 10)
欧州	57 (+ 58)	53 (+ 45)	61 (+ 50)	56 (+ 55)	55 (+ 43)	70 (+ 52)

(注) カッコ内は前年同期(月)比増減率(%)。

アジアはインド、タイ、フィリピン、シンガポール、インドネシア、台湾、韓国、香港、琉球。

欧州は英国、西ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ギリシア。

一方12月の輸入はやや増加が目立ち、前年同月比減少率でみると為替・通関共1割弱の水準にま

輸 入 承 認 の 内 訳

(単位・百万ドル)

(月平均)	37年 4～6月	7～9月	10～ 12月	10月	11月	12月
食 料	63 ( 59)	56 ( 59)	74 ( 48)	58 ( 37)	63 ( 44)	102 ( 62)
原 材 料	247 (314)	218 (291)	267 (223)	217 (196)	270 (220)	315 (252)
原 綿	33 ( 50)	27 ( 37)	37 ( 23)	27 ( 16)	36 ( 24)	49 ( 28)
原 毛	26 ( 37)	20 ( 27)	24 ( 21)	23 ( 21)	22 ( 21)	28 ( 20)
鉄 鉱 石	19 ( 20)	21 ( 21)	20 ( 17)	21 ( 16)	19 ( 16)	21 ( 20)
く ず 鉄	13 ( 50)	10 ( 35)	8 ( 23)	7 ( 20)	7 ( 27)	10 ( 24)
石 炭	13 ( 8)	12 ( 13)	11 ( 7)	10 ( 3)	12 ( 8)	12 ( 9)
石 油	48 ( 36)	38 ( 40)	61 ( 35)	48 ( 35)	72 ( 29)	63 ( 41)
木 材	21 ( 20)	23 ( 26)	24 ( 26)	19 ( 28)	25 ( 24)	28 ( 25)
鉄 鋼	3 ( 16)	5 ( 19)	4 ( 12)	3 ( 12)	5 ( 12)	4 ( 11)
機 械	63 ( 72)	51 (108)	61 ( 40)	71 ( 42)	45 ( 40)	68 ( 39)
その他共計	428 (510)	378 (542)	454 (365)	392 (326)	429 (358)	541 (411)

(注) カッコ内は前年同期(月)額。

で戻った。前年12月は輸入水準が減少に向かった月であることを考慮して、センサス法による季節変動調整済み計数でみても、輸入は季節性をやや上回って漸増気配にあることがうかがわれる。また品目別(通関)でみると、素原材料、ことに石油、木材、大豆などの増勢が目立ったほか、食料でも砂糖、とうもろこしが買付け期のため著増、機械も前月減少の反動もあって増加し高水準を維持している。

主要原材料の輸入動向を先行指標、原材料在庫状況などからみると、鉄鋼原材料では季節的買付

け期に当たるくず鉄にやや増加気配がみられないではないが生産動向からみてまず落着きぎみに推移するものとみられる。繊維原料、原油などは今後引き続き輸入水準は高まるものとみられ、また大豆、木材(建築用米国材)、生ゴム、原皮なども増勢に転ずる気配が出ている。このような主要原材料の輸入増加気配は、基本的には季節的なものであるが、同時に、昨春以来続いた在庫食いつぶしにより、在庫水準がすでにかなりの低水準となっているため、ここで若干在庫補充の動きがでてくることによるとみられる。しかもその背景に、最近の国内市況底入れ感に加え、海外市況の先高感がさきえとなっていることはいぬめない。即ち、繊維については米綿の先安見込みの訂正、従来割安であった中南米綿の値上がり、欧州筋の買い進みによる豪毛の高騰など原料相場の先高気配がみられる。こうした動きにつれて、このところ買付け態度がひとところに比べて徐々に活発化しているようである。石油は、季節需要が堅調であるため目先原油処理量をふやす動きもないではなく、若干の在庫積み増しが行なわれているようである。大豆油の市況もこのところ好転しているため、大豆の在庫補充買いの動きが出てきている。このような状況から、目先一時的な輸入の増加は避けられないようであるが、ただ鉄鋼をはじめとして輸入関連業種の生産がなお落ち着いた動きを続け、当面急速な立ち直りの気配がみられないこと、メーカーの原材料在庫感覚も自由化実施前とは変化していることなどの事情を考慮すれば、ある程度の在庫補充はみられるにしても、輸入増勢がさらに強められていく可能性は少ないと思われる。